

琉球大学学術リポジトリ

同一テーマに関する二つのコミック作品群の比較計 量分析 : BLコミックとゲイコミック

メタデータ	言語: ja 出版者: 琉球大学法文学部国際言語文化学科欧米系 公開日: 2012-11-22 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 金城, 克哉, Kinjo, Katusuya メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/25443

同一テーマに関する二つのコミック作品群の比較計量分析： BLコミックとゲイコミック

金城 克哉

0. はじめに

近年、ボーイズラブ（以下BLと略）コミック・やおい・腐女子に高い関心が寄せられている。（注1）2007年12月号の『ユリイカ』ではBLスタディーズが特集として生まれ、作者のインタビューを交えて様々な視点からBLコミック作品とその読者層、社会とのかかわりや意義に関する考察が加えられている。その一方でゲイを主たる対象読者層としたゲイコミックについてはそのような「スタディーズ」を冠する一群の研究は見られない。さらに、BLコミックとゲイコミック作品を客観的な基準に照らし合わせて分析する研究は管見では全くない。双方とも男性同士の出会い・恋愛・セックスという同一テーマを主たる内容としているが、BLコミックは「書き手も読み手もほとんど女性」（西原2009）であるという特徴があり、これはもう一方のゲイコミック作品が書き手・読み手が男性であることと対照的である。作品を生み出す側、対象とする読者層の相違、登場人物のキャラクター設定など従来指摘されてきた相違は作品中で使用される語彙にも影響を与えているのであろうか。本稿ではこの問いを出発点としてこれら2つの作品群に用いられる言語表現をデータとして収集しコレスポネンス分析を適用して考察を加えることを目的とする。

1. 先行研究とリサーチクエスチョン

言葉を計量的に分析する手法は戦後盛んに行われるようになった（計量言語学会の学会誌第1号発刊は1957年）。現在まで様々な研究成果があるが、近年で多変量解析を用いたものとしては、助動詞の出現率から数量化Ⅲ類を用いて源氏物語54巻の成立順序を分析した村上・今西（1999）の研究、男性誌と女性誌の特徴を25の観点から主成分分析によって探った陳（2005）の研究、ア

アメリカの歴代大統領の一般教書演説の語彙分析を行った仁科・平田（2008）の研究、多義語である接続詞の意味をフレーム結合価と対応分析を用いて分析した内田（2010）の研究などがある（柳井他（2002）所収の言語研究への多変量解析の応用例も参照のこと）。

一方、マンガは2次元的な「絵」・「コマ」・「言葉」そして作品を流れる「ストーリー」という4つの主要な要素から成り立っているが、「絵」や「コマ」など視覚的にインパクトがある特徴、またストーリー展開や「オチ」の有無といった側面を論じる解説や研究は多く見られる（四方田（1999）、夏目・竹内（2009）など）。一方、マンガの語彙に関しては齋岡（1987）の詳しい語彙調査及び『日本語学』（1989年9月号）所収の諸論考などの研究がある。（注2）しかしながら研究対象としてマンガ/コミック作品を見た場合、例えば作品中のキャラクターの容姿をどう捉えるかには読む側の主観が多分に影響を与えるきらいがある。BLには西原（2009：18）が指摘するように「美的レベルの高い男性」が多く登場する一方でゲイコミック誌の作品ではそれとは対照的に短髪で筋骨隆々としたキャラクターが登場するものが多い。男性的か否かという点で言えば筆者には男性性が全面に打ち出されているのは後者であるように思われる。しかしながら美的レベルの高低や男性性の有無の感じ取り方は分析者の主観にもある程度左右されるおそれがあり、特に異なるジャンルに属する作品の比較にはより客観的な比較基準が求められる。

これらの言葉の計量研究・マンガ研究の流れの中で、マンガの言葉に注目し計量分析を試みたものに大瀧（2006）がある。この論文の中で大瀧は反戦・反核マンガとして知られる『はだしのゲン』を分析し、物語が展開するにつれ具体的・直接的な表現から抽象的・間接的な表現へ移行していること、また主人公の主張は父親の影響を受けて反戦・反核の色合いが濃くなっていくことなどを明らかにしている。

これらの先行研究の現状にかんがみ、本稿のリサーチ・クエスチョンを(1) 各作品中の使用語彙を手掛かりとしてBLコミック作品群とゲイコミック作品群を特徴付けることができるか、(2) 特徴付けることが出来るとすれば、どのような語彙/表現が抽出できるか、とする。

2. データと分析の手順

BLコミックは月刊誌が発刊されており、作品数は膨大な数に上る。一方ゲイコミックは月刊で発行されている雑誌となっているものは無く、アンソロジーという形態で年に数回刊行されているものや総合情報誌の一部に掲載されているものがほとんどである。そこで、今回はBLコミック誌では入手可能な2011年9月～12月号で月刊・隔月刊誌11誌（各誌の平均所収作品数は16）の中からそれぞれ3編、計33編の作品を無作為抽出した。ゲイコミックでは『G-MEN』誌2001～2011年の中から2006年を無作為抽出し、さらにその年の1月号から12月号までの中から9編を、また『激男』、『爆男』、『G-Bless』、『極』などのアンソロジーから無作為抽出した号の中から3編ずつ抽出し、合計33編を分析対象とした（計66編の作家名と作品名、雑誌の（出版）年月（号）一覧は表1を参照のこと）。データ収集にあたり、原則としてそれぞれの作品の中で用いられる登場人物のセリフ、ト書き、オノマトペ（擬音語・擬態語）を全て収集した。ただし、建物名や看板の文字など作品中の人物が視認できる言葉は収集の対象外とした。また、収集に関しては次の点にも留意した：

- (1) 入力を簡略化するため、沈黙を表わす三点リーダー「…」はその長さにかかわらず1行の出現を1回としてカウントした。2行に及ぶ場合は新たな出現としてカウントした。
- (2) 同様に沈黙を表わすダッシュ「—」も1行に現れる長さに関わらずダッシュ1つ（1文字分）としてカウントした。2行にまたがる場合は「…」の場合同様、新たな出現としてカウントした。（注3）
- (3) ひらがな・カタカナで50音表にない特殊文字（例：「あ」に濁点をつけたものなど）は符号を取り去ったものを採用する。

この抽出データは立命館大学の樋口耕一氏によって開発されたKH Coderを用いて分析を行った。

3. コレスポネンス分析を用いた分析の特徴

今回分析に用いたコレスポネンス分析は数量化Ⅲ類を発展させたものであるが、数量化Ⅲ類とは異なり、クロス集計表の各欄の値が0か1かという縛り

表1 雑誌名・出版年月・作者・作品タイトル一覧

No.	マーカ	雑誌名	出版年月号	作者	作品タイトル
1	b1	Blink	2011年9月号	柚摩サトル	欲情アンチパー
2	b2	Blink	2011年9月号	双葉はづき	三次元ロマンス
3	b3	Blink	2011年9月号	河村なつ	Secret!!
4	c1	Chara Selection	2011年9月号	加東セツコ	オーバーテイク
5	c2	Chara Selection	2011年9月号	大槻ミウ	カラスにダイヤモンド
6	c3	Chara Selection	2011年9月号	山田まりお	シラフでいても意味がない
7	g1	GUSH	2011年10月号	桑原祐子	君と朝ごはん!
8	g2	GUSH	2011年10月号	水渡ひとみ	初恋にサヨナラ
9	g3	GUSH	2011年10月号	岡田冨世	逆転!
10	m1	MAGAZINE BExBOY	2011年10月号	南月ゆう	わんだふるLOVER
11	m2	MAGAZINE BExBOY	2011年10月号	鳴坂リン	甘い夢をささやいて
12	m3	MAGAZINE BExBOY	2011年10月号	笹村剛	ラブ・ミーベイバー
13	a1	AQUA	2011年10月号	新也美樹	ケダモノ外科医と研修医T
14	a2	AQUA	2011年10月号	冬乃郁也	相・恋・思案
15	a3	AQUA	2011年10月号	宮沢ゆら	いじわる恋レシピ
16	h1	花音	2011年10月号	麻々原絵里依/遠野春日	茅島氏の優雅な生活
17	h2	花音	2011年10月号	南野ましろ	溺愛ハニーパンチ
18	h3	花音	2011年10月号	上川さち	臆病者に愛の手を~それから~
19	k1	花恋 カレン	2011年11月号	鷺沼やすな/やまかみ梨由	アンチロマンティストの憂鬱
20	k2	花恋 カレン	2011年11月号	鹿谷サナエ	愛があれば大丈夫
21	k3	花恋 カレン	2011年11月号	島みのり/かんべあきら	ご奉仕の時間!?
22	kyl	キャピ!	2011年11月号	紅蓮ナオミ	ラブ・トラッカー
23	ky2	キャピ!	2011年11月号	魚ともみ	真面目くんと不真面目くん
24	ky3	キャピ!	2011年11月号	袖谷晴日	反則っ!
25	r1	麗人	2011年11月号	直野憐羅	無知とお化けのしつけ方
26	r2	麗人	2011年11月号	CJ Michalski	おばあちゃんコ
27	r3	麗人	2011年11月号	吉池マスコ	こけむすまで
28	d1	Dear+	2011年12月号	北別府ニカ	カシミヤ、ワール、モヘア、ぼく。
29	d2	Dear+	2011年12月号	藤川桐子	僕とあなたの30日生活
30	d3	Dear+	2011年12月号	夏目イサク	鉛色パラドックス
31	bg1	BE-BOY GOLD	2011年12月号	富士山ひょうた	彼女は悪態にひるまない
32	bg2	BE-BOY GOLD	2011年12月号	みなみ遙	LOVE アロマ BODY
33	bg3	BE-BOY GOLD	2011年12月号	東野裕	ドラマティックに奪え
34	G1	爆男vol.4	2005年8月	野原くろ	アナザー・タッグ グリオとサルオ!
35	G2	爆男vol.4	2005年8月	窪田僕	17歳
36	G3	爆男vol.4	2005年8月	山茶国生	銀河の友だち
37	G4	G-MEN	2006年1月号	松崎司	覗機関請物狂
38	G5	G-MEN	2006年1月号	戎橋政造	Burst Beast
39	G6	G-MEN	2006年1月号	田亀源五郎	君よ知るや南の獄
40	G7	G-MEN	2006年2月号	山巖	めがねと一くをしよう。
41	G8	G-MEN	2006年3月号	信濃路福太/大門政々	ゆきむし
42	G9	G-MEN	2006年5月号	小日向	独裁者
43	G10	G-MEN	2006年7月号	市川秀和	中年空手道場
44	G11	G-MEN	2006年10月号	山茶国生	第3寮のラグーマンたち
45	G12	G-MEN	2006年10月号	あすかともゆき/立川アキラ	淫乱浴場記
46	G13	激男vol.6	2006年6月	市川和秀	男気
47	G14	激男vol.6	2006年6月	竹本小太郎	誕生日
48	G15	激男vol.6	2006年6月	大塚空	UP TO YOU
49	G16	激男vol.10	2007年9月	松武	レンズ越しに見えたもの
50	G17	激男vol.10	2007年9月	和川洗稀 3K	難しい言葉
51	G18	激男vol.10	2007年9月	怠惰マン	拝啓「男」眼鏡様
52	G19	激男vol.13	2008年7月	えすとえむ	Beautiful Nosebleed
53	G20	激男vol.13	2008年7月	松崎司	エストレージャ

54	G21	激男vol.13	2008年7月	尼野豆太	酒のアヤマチ
55	G22	GBless 04	2009年10月	市川秀和	恋の罫
56	G23	GBless 04	2009年10月	菅嶋さとる	あの頃に逢いたい
57	G24	GBless 04	2009年10月	松武	新米銀行員九竜光司の受難
58	G25	GBless 07	2010年4月	ZIN	残し想人
59	G26	GBless 07	2010年4月	水樹凱	飼われゆくモノ
60	G27	GBless 07	2010年4月	NODAガク	アブない関係
61	G28	肉体派vol.18極!!	2010年12月	田亀源五郎	MISSING
62	G29	肉体派vol.18極!!	2010年12月	水樹凱	ハイドロマンス
63	G30	肉体派vol.18極!!	2010年12月	鬼嶋兵伍	さらわれて愛の森
64	G31	Comic G-men Gaho 02	2011年5月	Netcub	今日から残業
65	G32	Comic G-men Gaho 02	2011年5月	貞李	水曜日の男
66	G33	Comic G-men Gaho 02	2011年5月	戦艦コモモ	駅前不動産屋繁盛記

がなく、また他の多変量解析手法とは異なり変数とケースを区別せず第1アイテムと第2アイテムと呼び、行列の転置を行っても分析結果は変わらない（データの性質の違いが問題にならない）とされる。多変量解析の中でも主成分分析ではデータの合成が、因子分析では分解が主目的となるが、コレスポンデンス分析では行・列関係の視覚化による第1アイテムと第2アイテムのカテゴリ分類が主眼となり、第1アイテムと第2アイテムが同時に分類されるというメリットを持つ（石川・前田・山崎 2010）。この手法では第1アイテムと第2アイテムの間に相関があることを想定しており、データ表における行と列の相関(正準相関)を最大にするよう数量化を行っている（仁科・平田 2008）。

4. 予備分析とコレスポンデンス分析のためのコーディング

今回の分析の第1段階として、名詞・動詞・形容詞・形容動詞の4品詞において出現頻度の高い語を抽出し、それを手掛かりに作品群の特徴が記述できないか予備分析を行った。名詞では最小出現数50以上の高頻度11語（「仕事」「兄ちゃん」「男」「自分」「部屋」等）が抽出されたが、これらはストーリーとキャラクターの設定に大きく左右されるものであるため、名詞では高頻度語をそのまま差異判別の手掛かりにすることはできないと判断した。形容詞・形容動詞については頻度40以上の10の語（「好き」「嫌」「悪い」「いい」等）によって分析を行い、ある程度の見通しがついたため、さらに感情表表現（「恥ずかしい」「楽しい」「嬉しい」「怖い」など）に絞り込んで分析したが、本稿では紙幅の都合上詳しい検討はできない。一方、動詞では最小出現数100で12の動詞（「思う」「言う」「する」等）が抽出されたが、いずれもどのタイプのコー

パスにも高頻度で出現する語であり、作品群の特徴づけには寄与しないと判断した。この予備分析を踏まえ、今回はBLコミック・ゲイコミック双方の内容を考慮し「人称・身体・性行為・感情表出・恋愛・授受表現・終助詞・記号」のカテゴリーを設け、それらカテゴリー関連語句を分析に用いることとした。

これらのカテゴリーは、(i)作中人物が自己及び他者をどう呼ぶか、(ii)セックスなどの内容を踏まえ身体及び性行為に関する語彙が出現するか、(iii)感情表出に関わる形容詞にはどのようなものが多いか、(iv)恋愛に関する語彙は見られるか、(v)終助詞、特に男性が用いるとされる終助詞の現れ方に特徴はあるか、さらに(vi)人間関係に関わる授受表現の出現になんらかの特徴が見られるかという観点をもとに設定した。またカテゴリーごとに複数のコードを設定した。

例えば、登場人物が自分自身を指し示す自称詞には様々な語が用いられるが、今回の調査では特に「俺」の使用が目立った(801例)。この自称詞「俺」には漢字の他にも「オレ」(174例)と「おれ」(37例)という2つの異なる表記が用いられる。いずれの作品でどのような表記が多いかという問題も十分興味深いと思われるが、今回は「俺」「オレ」「おれ」のいずれかが1回現れた場合に「俺」という自称詞が1回出現したとカウントすることとした。このように、複数の異なる語(「俺」「オレ」「おれ」)の出現をグループ化し一定の名称(=コード)(例:「俺」)で括ることをコーディングと呼ぶ。今回の調査で用いた主なカテゴリーとそれぞれのカテゴリーに配したコードは表2の通り。

また、データ入力の際でマンガでの記号の用いられ方は一般の文章とは異なる点があることに気づいた。特に沈黙を表すダッシュ「—」は三点リーダー「…」とともに頻繁に用いられている。このように文章中の記号を手掛かりとした先行研究に金・村上(2003)がある。そこでは井上靖、三島由紀夫、中島敦の3人の作家の文章を比較し、それぞれの作家を特徴付ける情報としての位置に読点が現れるかという情報に、作家それぞれの特徴が現れやすいとしている。また齋岡(1987:317)では会話文で少女漫画に「!」や「…」の使用が多いと指摘されている。今回は個々の作家に注目することはできないが、BLコミック誌とゲイコミック誌それぞれに記号の特徴的な使用が見られるの

表2 カテゴリーとコード一覧

カテゴリー	コード
人称	俺、僕、わたし、キミ、あなた、あんた、おまえ、 てめえ、こいつ、そいつ、あいつ、やつ、かれ
身体	尻、陰茎、睾丸
性行為	挿入、射精、挿入擬音、射精擬音、
感情表出	嫌い、イヤ、好き、うれしい、楽しい、怖い、 恥ずかしい
恋愛	愛、恋
終助詞	ぜ、な、ね、よ
授受表現	～てもらう、～てくれる、～てあげる、～てやる
記号	…、一、!、?

ではないかと考え、頻出4種の記号「…」「一」「!」「?」をそれぞれ独立したコードとして設定した。(注4)

5. 分析結果

まず全てのコードを用いてどの程度両者の違いが出るのかを見てみよう。図1では全コード(◇)の散布状況が、また図2ではBLコミック作品(△)とゲイコミック作品(□)の散布状況が示されている。図中において近接する項目は類似性が高いことを示しており、逆に離れている項目間は異質性が高いことを示している。また図1と図2はお互いに対応していることから、図1と図2を照らし合わせることでコードと語彙との関係を読み取ることが可能となる(コードと作品の同時プロットも可能であるが、全体的に視認性が低下するため今回は2種類の散布図を作成した)。

図1・図2では成分数が多いため累積寄与率が24.35%と低い値となっているが、必要最低限の情報は得られると考える。図1では、コードを表わすドットが縦軸を境に図の右側(第1象限と第4象限)に集中しているが、左側ではそれほど集中の度合いが高くないことが分かる。これに対応する図2では、同様に縦軸を境に右側、特に第4象限にBLコミック作品が多く見られ、ゲイコミック作品は全体的に左側(第2象限から第3象限)に多く散らばっている様子が見て取れる。ゲイコミック作品がプロットされた第2象限には「陰茎」「尻」

号の各コードを順に見ていこう。作中の人物は「俺」「あんた」「彼」などの人
 称詞や「～さん」「～くん」などの呼称を用いて自分自身を含め作品中の様々
 な人物に言及する。図3と図4に人称詞と呼称のコード15と作品の布置図を示
 す。上述したように、一人称では「俺」の出現数が多い。またこの自称詞は
 「お前」「こいつ」「やつ」などの語と強いつながりをもつことが分かる（図3
 の第2象限）。

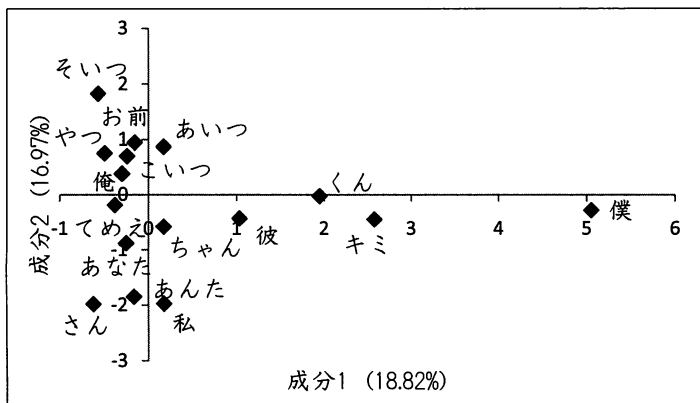


図3 人称詞・呼称におけるコード散布図（累積寄与率35.79%）

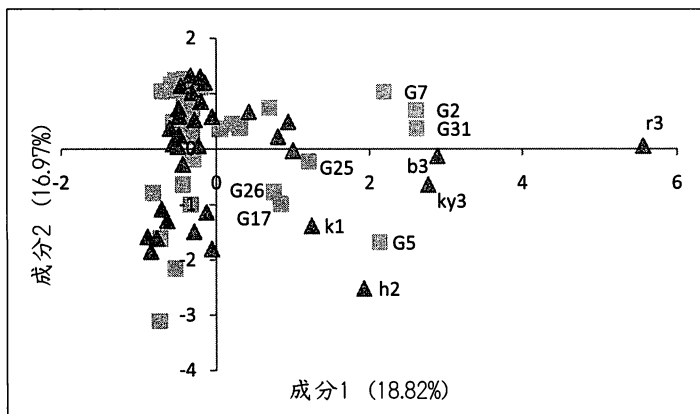


図4 人称詞・呼称における作品散布図（累積寄与率35.79%）

またこの図3からは縦軸に沿って11のコードがプロットされ、「彼」「～くん」「キミ」が図の右側にあり、最も原点から遠いところに「僕」がプロットされているのが分かる。このように他の語句から遠く離れているカテゴリを「外れ値」と言い解釈に注意を要するが、今回の調査では66作品の中で52回出現しており、無視できる頻度だとは思われない。この点については次の考察で取り上げる。

次に身体と性行為（挿入）への言及について見てみよう。図5は身体部位及び性行為コードと作品を布置したものであるが、ここでは性行為に関する語句（「掘る」「入れる」「挿（れる）」）と身体部位の尻にかんする語句（「ケツ」「尻」）の周辺にはBLコミック作品とゲイコミック作品が共に布置されているにもかかわらず、「陰茎」のコード（作品中では「チンポ」「チンコ」などとして出現）と「射精」のコード（作中では「イク」「イク」「出る」などとして出現）の周辺にはBLコミック作品の布置がないことがわかる。すなわち、BLコミック作品ではこれらの語句に言及していないということである。

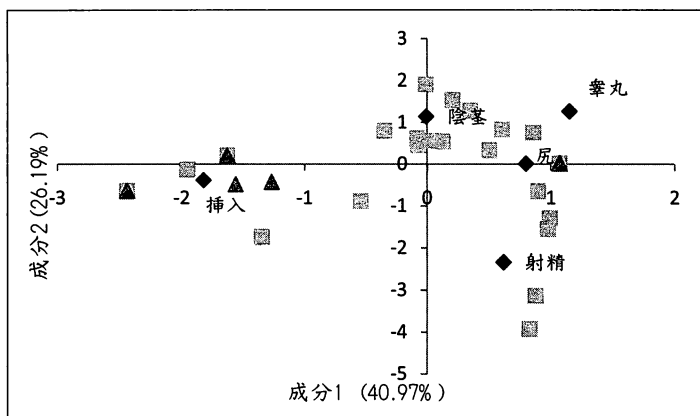


図5 身体部位及び性行為と作品の2次元図示（累積寄与率67.16%）

図6は射精と性行為にそれぞれの擬音を加えた4つのコードについて作品がどのように布置されているかを表わしているが、行為擬音のコードの座標近く

にはBLコミック3作品が布置されているものの、「射精擬音」の座標近くにはBL作品が布置されていないことがわかる。

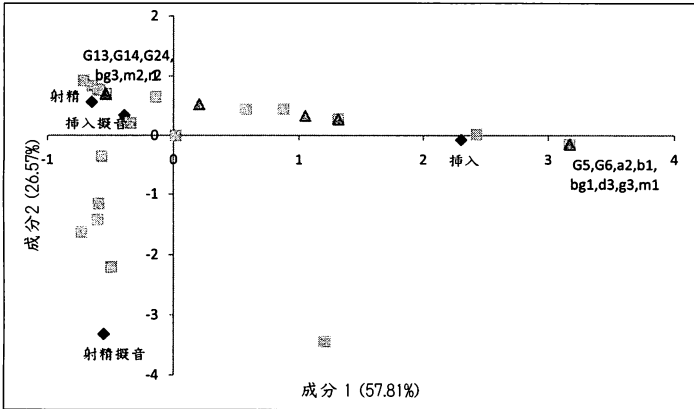


図6 挿入（擬音）及び射精（擬音）と作品の二次元図示（累積寄与率84.38%）

さて、BLコミック作品は登場するメインキャラクターがどのように相手の男性と結ばれるかという側面を重視して描かれているとされる（後述のやまねの言及を参照）。上述した感情表現の中に含まれる「好き」や「嫌い」とは別に、作品中には「愛」や「恋」といった言葉が出現するであろうか。ゲイコミック作品ではどうであろう。コレスポネンダ分析では「多くのカテゴリを少ない次元に圧縮する」（石川・前田・山崎 2010）ため、今回設定した「愛」と「恋」という2種のコードのみでは不十分である。ここでは「恋愛」のような精神的な活動を表す語句と対比される肉体的な活動に関するコード（「挿入」と「射精」）を同時プロットして対比関係を見てみる。図7では縦軸を境に左に肉体的な活動が、右に精神的な活動がプロットされ、その周囲に作品が散らばっている様子が見られる。「愛」の座標近くにはBLの5作品とゲイコミック1作品がプロットされている。興味深いのはBLだけではなくゲイコミックにおいても「愛」や「恋」に言及するものがあるということである。

終助詞と記号では両コミック作品の違いが鮮明な形で現れる結果となった。

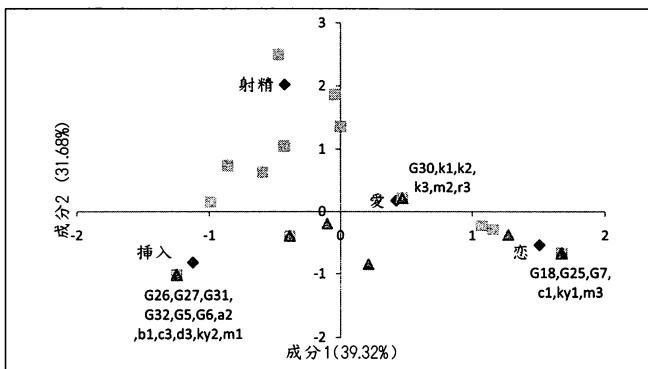


図7 性行為・恋／愛と作品の2次元図示（累積寄与率71%）

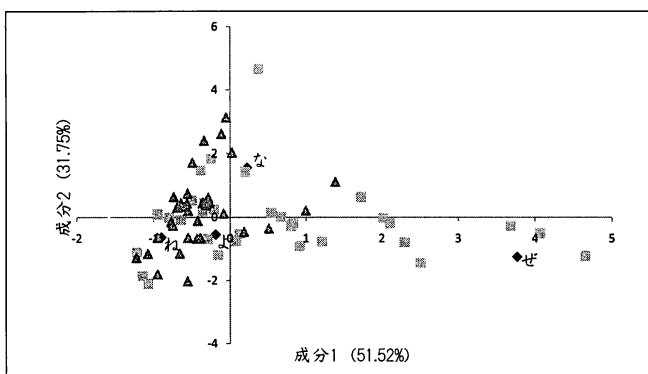


図8 終助詞と作品の2次元図示（累積寄与率73.97%）

図8は終助詞「な」「ぜ」「よ」「ね」と作品の布置図であるが、縦軸をはさんで左側の「ね」と「よ」あたりにBLとゲイコミック双方が集中し、原点近くにBLの2作品ky2とm2があるものの、概して右側の「ぜ」周辺にはBLコミック作品が布置されていないのがわかる。また、図9からはBLコミック作品とゲイコミック作品では記号の使い方に差がある様子がうかがわれる。ゲイコミック作品は横軸を境に上部に主に布置されているのに対し、BLコミック作品はダッシュ「—」記号がある横軸の下部に多く分布しているのが分かる。

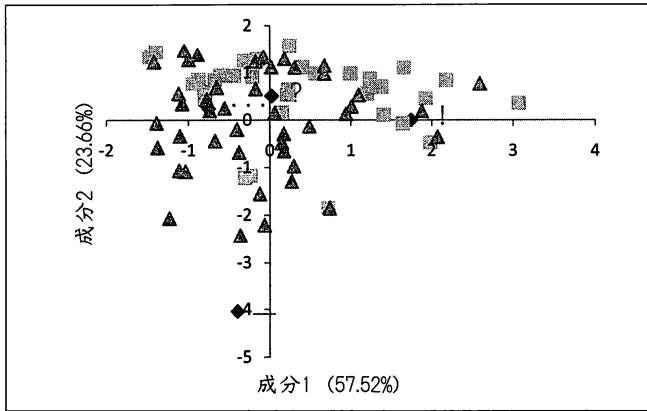


図9 4種の記号と作品の2次元図示（累積寄与率81.18%）

6. 考察

今回の調査前は、BLコミック作品とゲイコミック作品はキャラクターの設定や場面を始めキャラクターが語る言葉も異なり、そのために作品中に出現する語句にもはっきりした差が現れるのではないかと予想したが、性行為の描写が緻密なゲイコミック作品においても「僕」と自称するキャラクターが登場し、好悪をはじめとする感情表出を行い、「愛」や「恋」、さらに「性行為」への言及もなされるという点では両者に目立った差は見られなかった。

「僕（ボク、ぼく）」は「男が同等（以下）の相手に対して使う、砕けた自称」（『新明解国語辞典』）であるが、「俺」と比較すると相手に丁寧・知的・思慮深さ・優しさといった印象を与える（金水2007）。（注5）このことから男性性を強く意識させるゲイコミックでは「僕」の出現が少なく、BLコミック作品に多く出現するのではないかと考えたが、図3が示すように「僕」の周囲にはゲイコミック作品も布置されており、必ずしもゲイコミックで「俺」が用いられているわけではないことが分かった。（注6）

その一方、終助詞の「ぜ」の出現に関しては両者に差が認められた。この終助詞は男性語として「自分の発言内容を、聞き手に軽く念を押したり主張」す

る、また「話し手の考えを一方向的に聞き手に知らせる」働きを持つが、同様の働きをもつ「よ」と比較して「ぞんざいな感じ」を与え、「使用者は基本的に男性に限られる」とされる（日本語教育学会1982：413；2005：147、中崎2005、陳2010）。このことから「俺」と自称はするものの、BLに登場するキャラクターは「ぜ」を多用するほどには粗野に描かれていないことが分かる。（注7）

吉本（2007）は近年BLコミック作品とゲイコミック作品の「越境、境界のあいまい化」が起こっていると指摘する。従来は両者が描写や方法論においてかけ離れたものであると考えられてきたが、「男二人の関係性がしっかり描かれている」点、『激男』のような対象を問わないアンソロジーの出版（その中には従来BLで活躍していた作家の執筆も重要な要素となっている）などがその「越境」のバックボーンとなっているが、作者・読者双方が多様化するなかで、ゲイコミックの中にも優れた作品があることが一般に知られるようになり、またBLの側からは次のような流れが起こってきたと述べている：

その中ではっきりした流れとして起こってきているのが、リアリズム追求の流れだ。愛の形もセックスの形も、単なるエンターテイメントでは物足りなくなり、よりリアルで説得力のあるものが求められるようになってきた。

その結果、作家の交流や抑圧の構造の可視化がおり、それが結果として「社会のタブーへの挑戦」となると吉本は指摘する（2007：248）。

今回の調査結果を見るとBLコミック作品では特定の身体部位（男性器）へ言及することがタブーであるかのような印象を受ける。データ収集に用いたアンソロジーの中の『肉体派』では、ゲイコミック作家（田亀氏）の作品の中でさえ、「チ○ポ」や「キ○タマ」などの伏字が用いられているのは、このアンソロジーを出版している出版社がBLコミック誌の出版社と同一であることと無関係ではないと思われる。リアリズムの追求は対象の正確な把握と描写を前提とするのではないか。そうであれば、このような語句への直接言及が制限されているというのはこの種のアンソロジーがゲイを読者層として捉えつつも、主たるターゲット層を女性としているのではないかと考えられる。

さて、リアリズムの追求という点で言えば、オノマトペは描写にリアリティ

を与えると考えられる。BLコミックに登場する人物の中には相手との関係で精神的・肉体的に優位に立ち、受と呼ばれる相手を「攻める」者（＝「攻め」と呼ばれる）がいるが、性行為の描写の延長線上に予想される射精への言及は、しかしながら、BL33作品中わずか3作品にとどまり、射精擬音にいたっては皆無である。

BLの漫画家であるやまねあやはインタビューで次のように語っている：

やまね：挿入シーンがないのは、たぶんページ数の関係で削っているということだと思います（笑）。ページがあれば、きつともつがつり描いていると思います。エッチシーンで一番盛り上がるのは、挿入の瞬間だと思いますから、その瞬間を描くのは重要ですよね。（中略）受が気持ちよくなっているところを描かないと、読者は満足できないと思うんですけど、それをちゃんとやろうとすると、どうしてもページ数が足りなくなる。受が気持ちよくなったところで終わり、というのが多いですね本当は攻もちゃんと気持ちよくなってなんぼだと思うんですけどね。

もちろん全てのBL作家がそうだとは言えないが、やまねの場合セックスシーンを描くのにページ数が足りないと言う。しかしこれは裏を返せば他の描写にページ数を割いているということであろう。BL作品よりもページ数が少ない中で（BLは平均28.27ページ、ゲイコミックは20.84ページ）セックスシーンがしっかり描かれているゲイコミック作品とは対照的である。やまねは性行為で最も盛り上がるのは挿入だとするが、これは「性行為というプロセスを楽しむ」という視点から見たものであり、そのプロセスの先に射精という終点があるという視点が欠落している。その終点をクライマックスと捉えるか否かが性行為をリアルに描くか否かの分岐点になっているように思われる。

最後に、記号の使用についてあらためて見てみよう。BLでの三点リーダー「…」の出現数は2,517例、ゲイコミックでの出現数は2,286例であるが、BLでは「…っ」というように、「…」のあとに「っ」をつける用例が247例（9.81%）あり、これはゲイコミックの138例（4.29%）を上回っている。また、ダッシュ「—」の使用は、BLが350例、ゲイコミックが145例と倍の開き

がある。さらに、どのような状況で用いられているのかという点で言うと、ダッシュの左右に「…」が位置する 경우가多く(左26例、右89例)、その中でも「……」というようにダッシュと…が連続で用いられるケースはBLで89例、ゲイコミックで30例であり、約3倍の開きが見られた。

言語研究としての談話分析では会話の中のポーズに様々な意味があると考えられる。水谷(2001)はポーズには相手への働きかけという作用があるとし、「自分の発言に注目してほしい場合と、あいづちを打ってほしい場合」とがあると指摘している。また、日常会話では会話の順番取りのルールが働くため話し手もしくは聞き手が「間」を埋めるためにポーズが開くとすぐに話し始めるケースも見られる。マンガの作中人物の会話に水谷の説や会話の順番取りのルールをそのまま適用するわけにはいかないが、少なくとも一定の長さの沈黙は会話、ひいてはその場面に緊張をもたらすということは言えるであろう。短いポーズ「…」はBLにもゲイコミックにも多く見られたが、とくにダッシュで示されるような長いポーズによって場面に緊張がもたらされるという推論が正しければ、BLコミックにおいては登場人物間に緊張関係が多く見られるということも言えるのではないか。このことはやまねが語っていたように、紙幅の都合で性描写に割く余裕がないということの裏返し、すなわち作中人物の人間関係を細かに描いているということにつながっているのではないかと考えられる。

7. おわりに

以上、BLコミック誌とゲイコミック誌に登場する言語表現を収集し、対応分析を適用することで2つのジャンルでの使用語彙の実態を計量的に可視化させ分析を試みた。両者間において使用される語彙については概ね以下のようにまとめることができる。

- (1) 人称・呼称表現ではBLコミックとゲイコミック作品には明確な相違は見られなかった。66の全作品を通して「俺」という自称詞が最も多く用いられるが、男性性の点においてはやや弱い「僕」も双方の作品群に出現している。二人称では「あんた」の使用では恋愛対象となっている社会的身分の高い者に対して低い者が用いるという用法が見られた。三人称では

ゲイコミック作品で「やつ」および「そいつ」の使用が多く見られた。

- (2) 身体部位および性行為に関する語では、男性の具体的な身体部位への言及がBLではほとんど見られなかった。
- (3) 性行為と射精およびそれぞれの擬音を加味した分析では、挿入を表わす言葉（「入れる」「挿入」など）はBL作品でも多く見られるが、挿入を模した擬音や射精およびそれを模した擬音はゲイコミックで多く見られた。
- (4) 「よ」・「ね」・「な」・「ぜ」の4種の終助詞の分析では、ぞんざいな表現とされる「ぜ」がゲイコミックで多用されていることが分かった。
- (5) 4種の記号では、BL作品がダッシュを多用していることが分かった。

今回の調査では限られた作品群を母集団とし、それぞれのグループから33作品のサンプリングを行なったが、その中に出現する語彙はやはり限られたものとなってしまう。さらに母集団の範囲を広げサンプリング数を多くすることで各グループの実像にさらに近づくことができるのではないかと考える。また、長期連載されているような作品があれば、それをデータとして他の作品と比較するという試みも意義のあることだと思われる。本研究ではマンガ研究ではそれほど重視されてこなかった言語表現に焦点を合わせ、計量的に分析する方法を探ったが、絵の部分も何らかの方法で計量しそれも併せて考察できればなお一層充実した研究に発展することができると思われる。今後はそのような方法も視野に入れた研究を行っていきたい。

註

1. ボイズラブ (BL) という名称は「1991年の白夜書房『イメージ』の表紙で登場し、現在に受け継がれたもの」であるとされる (西原2009)。
2. 夏目・竹内 (2009) の『マンガ学入門』ではマンガ学の多角的なアプローチ (キャラクター、編集者の役割、アニメーションとのかかわり、表現規制等) に触れられているが特にキャラクターの発する言葉が1つのアプローチと位置づけられているわけではない。また、四方田 (1999) には言語メッセージと「風船」についての論考がある。
3. これらは実際に点が何個現れるのか、また長いダッシュにはいくつのダッ

シュが含まれるかを割り出すという煩雑な作業を省くためにやむを得ず行ったものであり、本来はきちんと計測すべきものである。

4. 表2にあげた8つのコードのうち、感情表出に関わる形容詞・形容動詞と授受表現について、今回は(1)感情表出表現では「恥ずかしい」と「楽しい」が他のコードとは異なる特徴を持つものとして取り上げられたこと、および(2)授受表現では「～てあげる」が同じ授益表現の「～てやる」と区別されていることを指摘するにとどめる。
5. 荻野(2007)は東京近辺の学生の自称詞を調査しているが、男性では近年丁寧に接するべき人に対して「自分」を文の主語として用いて「自分は～」という言い方をしているケースが増えていると報告している。今回のコミック誌の調査ではこのような「自分」の用法は見られなかった。
6. 王(2010)は「ぼく」の使用について、特に制限がないが、「年上の男性相手には多く使われている」と指摘している。
7. 中崎(2005)は「ぜ」が金水の「役割語」に近い存在となっていることを示唆している。

参考文献

- 陳一吟. 2010. 「日本語終助詞におけるジェンダー：大学生の自然会話に焦点を当てて」『比較社会文化研究』29: 61-70.
- 陳志文. 2005. 「男性誌と女性誌に見られる文体特性の相違——『論理的』と『感性的』——」『計量国語学』25(1): 32-45.
- 石川慎一郎・前田忠彦・山崎誠編. 2010. 『言語研究のための統計入門』くろしお出版.
- 甲斐陸朗. 1989. 「マンガのことば——問題提起——」『日本語学』8(9), 33-38.
- 金明哲・村上征勝. 2003. 「文章の統計分析とは」甘利俊一他編『言語と心理の統計：ことばと行動の確率モデルによる分析』岩波書店, 1-57.
- 金水敏. 2007. 「近代日本マンガの言語」金水敏編『役割語研究の地平』くろしお出版, 97-107.
- 水谷信子. 2001. 「あいづちとポーズの心理学」『言語』30(7), 46-51.

- 中崎崇. 2005. 「独話場面における終助詞『ぜ』の機能」大阪外国語大学日本語講座『日本語・日本文化研究』15: 57-65.
- 村上征勝・今西祐一郎. 1999. 「源氏物語の助動詞の計量分析」『情報処理学会論文誌』40(3): 774-782.
- 夏目房之介・竹内オサム編著. 2009. 『マンガ学入門』ミネルヴァ書房.
- 日本語教育学会. 1982. 『日本語教育事典』大修館書店.
- . 2005. 『新版日本語教育事典』大修館書店.
- 仁科恭徳・平田恵理. 2008. 「米国歴代大統領における一般教書演説の語彙分析」『JACET関西紀要』10: 27-41.
- 西原麻里. 2009a. 「情報コラム やおい・ボーイズラブ」夏目房之介・竹内オサム編著『マンガ学入門』ミネルヴァ書房, 227.
- 西原麻里. 2009b. 「『ボーイズラブ』のキャラクター造形に関する一考察」『メディア学』24: 16-36.
- 王龍. 2010. 「日本の男性の話し方の特徴」『比較社会文化研究』29:23-30.
- 荻野綱男. 2007. 「最近の東京近辺の学生の自称詞の傾向」『計量国語学』25(8): 371-374.
- 大瀧友織. 2006. 「『はだしのゲン』の計量的分析——表現変容プロセスに見る<感性>と<理念>の揺らぎ——」大阪大学大学院人間科学研究科『年報人間科学』27: 121-133.
- 靄岡昭夫. 1989. 「漫画の語彙」『日本語学』8(9): 39-43.
- 内田諭. 2010. 「フレームに基づいた接続詞の意味記述：対応分析を使った試み」『杏林大学研究報告 教養部門』27: 89-98.
- 柳井晴夫・岡太彬訓・繁樹算男・高木廣文・岩崎学編. 2002 『多変量解析実例ハンドブック』朝倉書店.
- やまねあやの・藤本純子. 2007. 「目と脳で"感じる"マンガを」『ユリイカ』39(6): 55-61.
- 四方田犬彦. 1999. 『漫画原論』ちくま学芸文庫.
- 吉本たいまつ. 2007. 「ゲイマンガとBLマンガの越境」『ユリイカ』39(6): 247-248.

Quantitative analysis of two comic groups dealing with the same topic:
boys love comics and gay comics

Katusuya Kinjo

Abstract

This paper tries to analyze the similarities and differences of two comic groups, both of which deal with the same topic: men who love men. There has not been paid much attention to the linguistic expressions appearing in comic books, especially boys love (BL) comics and gay comics; although regarding the BL comics, there has been much argument concerning *Yaoi* and *Fujoshi*. This paper extracts linguistic expressions from 33 episodes from BL comics and 33 episodes from gay comics and analyzes using corresponding analysis. It is found that (i) there is little mention of body parts in BL comics, (ii) an utterance final particle *ze*, which expresses masculinity, is much used in gay comics, (iii) there appears much dash “—” which indicates silence in BL comics than gay comics.